真瀬川と三十釜

真瀬川の源流は白神山地の核心地域の中で合流し、川は八峰町のすぐ北の山から日本海へと流下する。山を下って流れ落ちる際、川は河床を浸食し、大きな岩石のあちこちが湾曲している険しい渓谷を形成した。

三十釜という名前は、川に関する地元の物語に由来している。この地域のほとんどの町は山に囲まれ、その歴史の大半において林業の町であった。1800 年代後半に日本が近代化される以前、伐採された丸太は、川に浮かせて下流へ、そして海へと輸送されていた。近くの八森で材木を伐採していた木こりたちは、丸太を小さく分けて積み重ね、束にしていた。それぞれの小片は約 1 メートルの長さで、文字通り「釜」を意味するカマと呼ばれるかたまりに束ねられていた。そして、木こりたちは丸木を川に投げ込み、それらの丸木はさらに下流に集められていた。ある日、下流にいた労働者たちは、着くはずの木材が全部到着していないことに気づいた。彼らは上流に移動し、30「カマ」相当分の木材が、川の流れに沿ってできた巨岩にさえぎられていた、あるいは潰されていたことが分かった。彼らはその後、失った木材の数から、この渓谷を「30 のカマ」つまり「三十釜」と名付けた。